

## 論文の要約

### メルロ=ポンティのソルボンヌ講義における中期他者論の再構成——人間の科学と現象学

立命館大学文学研究科人文学専攻

酒井麻依子

## 目次

序論	づけ
第一章　メルロ=ポンティの思想とソルボンヌ講義	第五章　メルロ=ポンティ他者論への従来の批判
第一節　メルロ=ポンティの生涯と思想区分	第一節　メルロ=ポンティ他者論への批判
第二節　ソルボンヌ講義の背景	第二節　メルロ=ポンティ他者論の先行研究
第三節　テキストの成立事情	第三節　他性をめぐる先行研究と本論文の意義
第四節　想定される批判	全体の流れ
第二章　メルロ=ポンティにとっての人間の科学と哲学の関わり	第一部　我々はいかにして他者を知覚するのか
第一節　人間の科学と現象学の関わり	第一章　現象学の他者論
第二節　メルロ=ポンティの現象学の方法	第一節　『知覚の現象学』における他者論
第三章　ソルボンヌ講義を他者論として扱う必然性	第二節　ソルボンヌ講義における他者論
第一節　メルロ=ポンティにとっての教育学と児童心理学	第一項　フッサールとシェーラーへの批判
第二節　子供、病者、未開人、女性という他者	第二項　メルロ=ポンティの議論
第四章　ソルボンヌ講義の評価	第二章　児童心理学と他者論
第一節　翻訳事情（英語圏）	第一節　癒合性と自己中心性
第二節　翻訳事情（日本）	第二節　鏡像
第三節　先行研究における評価・位置	第一項　ワロンとラカンの分析

- 第二項 メルロ=ポンティによる議論
- 第三節 模倣
  - 第一項 ギョームの模倣理論
  - 第二項 メルロ=ポンティによる議論
- 第三章 スティル
  - 第一節 フッサールの「類型」とマルローの「スティル」
  - 第二節 『世界の散文』におけるスティル論
  - 第三節 ソルボンヌ講義のスティル論：個人と集団
    - 第一項 個人のスティル：実験心理学
    - 第二項 集団のスティル：制度としての遠近法
- 第四章 言語活動と表現
  - 第一節 言語とその他の表現の関係
  - 第二節 構造の獲得
  - 第三節 言語獲得と対人関係
  - 第四節 コミュニケーションの分節化
  - 第五節 差異の体系
  - 第六節 意味作用
    - 第一項 直接的な意味作用
    - 第二項 「斜かい」の意味作用：意味への超出
- 第五章 意味と他者経験
  - 第一節 「役割」と「自己表現」における意味作用
  - 第二節 意味として現れる他者

- 第三節 役割を残し消える他者
- 第二部 我々は他者をどのようなものとして知覚するか
  - 第一章 類型：身体、民族、階級、人種
    - 第一節 『知覚の現象学』
      - 第一項 身体
      - 第二項 民族・階級について
    - 第二節 「戦争は起こった」
  - 第二章 類型：コンプレックス
    - 第一節 病的なものとしてのコンプレックス：『行動の構造』
    - 第二節 前人格的実存としてのコンプレックス：『知覚の現象学』
    - 第三節 文化的なものとしてのコンプレックス：ソルボンヌ講義
    - 第四節 エディプス・コンプレックスの普遍性をめぐる論争
    - 第五節 心理学か社会学か
- 第三章 類型：セクシュアリティ
  - 第一節 メルロ=ポンティにとってのセクシュアリティの重要性
  - 第二節 女性なるもの：ボーヴォワールの議論
    - 第一項 精神分析への批判
    - 第二項 史的唯物論への批判
  - 第三節 メルロ=ポンティの応答
    - 第一項 女性の〈本性〉の否定
    - 第二項 精神分析と史的唯物論

第四節 女性の出産と子供の誕生：ヘレーネ・ドイチュ	第四項 治療と自発性の回復
第五節 男女関係の文化的相対性：M・ミード	第五項 ソシオドラマとレイシズム
第四章 類型の伝承：個人と社会	第三部 我々は他者とどのように交流するか
第一節 文化人類学の流れ	第一章 嫉妬と愛
第二節 基本的パーソナリティ	第一節 自由の侵食と性質を通じた愛
第一項 アロール島	第一項 サルトルの愛
第二項 プレンヴィル	第二項 メルロ=ポンティの議論
第三節 ナヴァホ研究	第二節 嫉妬
第四節 家族における権威主義と自由主義：「心理的硬さ」	第三節 遺棄神経症
第一項 交互の繰り返し	第一項 G. ゲクスの議論
第二項 伝統のへ回帰と運命	第二項 アバンドニックの愛
第五節 精神分析的性格学	第三項 エディプス・コンプレックスとアバンドニック
第五章 自由	第四節 メルロ=ポンティの解釈
第一節 『知覚の現象学』の自由論	第二章 他者との交流
第二節 芸術家の自由	第一節 〈本性〉の「神話」と「鏡の現象」
第三節 サイコドラマと一般人の自由	第二節 大人と子供の原理的な不平等と当為
第一項 精神分析的起源	第三節 自他の不平等と平等の創設
第二項 マルクス主義的起源	結論
第三項 モレノ理論の心理学的側面について	参考文献一覧

## 全体の要旨

本論文の目的は、従来のメルロ=ポンティ研究においてその重要性が見過ごされてきたメルロ=ポンティの中期講義録、「ソルボンヌ講義」の体系的な読解を通して、表現の問題系によって特徴づけられる彼の中期他者論を再構成することにある。ソルボンヌ講義は児童心

理学と教育学の講座として開かれた一連の講義であり、そこでは広範な人間の科学の成果が取り上げられている。メルロ＝ポンティの思想において、人間の科学と哲学・現象学は相互包摂の関係と定義されており、それゆえ本論文ではソルボンヌ講義における彼の人間の科学への言及を現象学的他者論として読解した。ソルボンヌ講義では、人間の科学における観察者と被観察者（被験者）の関わり、大人と子供の関わり、男女の関わり、異なる文化間の関わりなどが論じられており、これは主体と他者の関わりを論じた他者論にほかならない。

### 各章の要約

第一部では、「我々はいかにして他者を知覚しうるのか」という問いの元に、他者知覚の構造を考察した。第一章では、『知覚の現象学』と「意識と言語の獲得」におけるメルロ＝ポンティの他者論を整理し、第二章で「幼児の対人関係」第一部の自己意識と他者認識の発達の議論を確認した。いずれも従来メルロ＝ポンティの他者論として取り上げられることの多い議論である。『知覚の現象学』とソルボンヌ講義「意識と言語の獲得」および「幼児の対人関係」第一部はいずれも、非人格性の次元からコギトが生じ、他者との人格的交流を持つという流れになっていると思われる。「幼児の対人関係」第一部において、他者は自己と同じ世界に向かう行動であり、自己の分身として現れるとされる。だが「もう一人の私」ではない、他なる我としての他者はスタイルの介在する表現においてこそ知覚される。

第三章ではメルロ＝ポンティの〈表現の他者論〉において重要な概念となるスタイルについて、メルロ＝ポンティが影響されたフッサールとマルロー、『世界の散文』、ソルボンヌ講義を参照しながらその特徴を明らかにした。スタイルとは全体的で相貌的な知覚にとって現れるものであり、普遍と個別を媒介する概念であり、またスタイルが相続されるものでありながら創造されるものであるという意味で、歴史性と創造性を媒介する概念である。さらに、スタイルはそのスタイルの主にとっては生きられているだけの前意識的なものであり、他者を介してのみ意識化されうるという特徴もある。

第四章では言語活動と表現の問題を整理し、言語活動が言語の習得以前から働いている〈他者への呼びかけ〉、他者との交流の意志の分節化であることを明らかにした。言語体系の獲得は、周囲で行われている言語活動のスタイルの獲得であり、この獲得は模倣の能力によって可能になるとされる。またこの言語活動のスタイルは特定の集団や特定の主体の世界への関わり方や対人関係のスタイルといったものを表しているものでもあった。言語の獲得は集団のスタイル、すなわち類型への同化であり、その類型を基盤にして作家におけるような個人の言語体系、個人のスタイルが獲得されるという構図になっている。メルロ＝ポンティにおいて、ソシュールらの言語論から手がかりを得つつも、彼が独自に展開した〈記

号から意味への「超出」<sup>1)</sup> という議論によって、「直接的な意味作用」と「斜かいの意味作用」という二種類の意味作用が区別される。「直接的な意味作用」は既得の意味作用によって、慣習的に記号が意味を指し示すのにたいして、「斜かいの意味作用」は、様々な表現に介入するスタイルの働きによってそれまで存在していなかった意味を意味作用もろとも作り出し、読者・聴衆・観客などを意味へと超出させる運動である。

第五章では言語論から発想を得た上の二種類の意味作用が、他者知覚の議論においても生かされていることを明らかにした。他者は自らの諸々の表現をその契機とした「自己表現」において、「意味」として主体に知覚されるとされ、その際、「斜かいの意味作用」が起きている。しかし、この「意味」は「斜かいの意味作用」によって生み出されるという新しさの側面を持つと同時に、自らの沈殿の作用によって過去と化す側面も持っており、それゆえ「意味」として現れていた他者は、紋切り型の表現を繰り返し、自らの過去の「役割」に埋没してしまう可能性がある。他者の「役割」への埋没という事態は、表現能力の減退による過去の一連の意味作用への埋没という解釈と、他者が個人的な表現において依拠せざるを得ない民族や人種、階級、人間という種などの一般性・類型への埋没という解釈のふた通りが可能である。これらの解釈はいずれもメルロ＝ポンティのテキストから裏づけることが可能であり、また彼はそれらを峻別しない形で議論を行っている。

第二部では、第一部での「役割に埋没する他者」の含意を明らかにするため、「我々は他者をどのようなものとして知覚するか」、という問いを立てた。また用語法の問題として、論者は第二部以降、第一部で明らかにしたスタイルの二つの側面、歴史性と創造性、一般性と特殊性（個別性）のうち、歴史性・一般性の側面を類型の語によって、創造性・個別性の側面をスタイルという語によって指している。他者が「役割」としてしか現れない場合には、他者の表現が過去なり集団なりの類型にとどまってしまう、他者は個人のスタイルによって自らの「意味」へと主体を至らせることがない（これは第三部で見るように、必ずしも他者の側の表現の問題であるとは限らず、他者を知覚する主体の側の表現（知覚）の問題でもある）。ここで言う類型には、身体、民族、階級、人種、コンプレックス、セクシュアリティおよび性などが含まれており、第一章から第四章までは類型の議論を行い、第五章では主体が自らの類型を取り上げ直し、個人のスタイルを獲得するという〈類型からスタイルへ〉の自由の問題を論じた。

第一章では『知覚の現象学』においては、有機体としての身体、民族・階級のような階級的意識が、「戦争は起こった」においては同じく民族と人種などが「役割」・類型として論じられていることを確認した。身体は、個人が精神的活動を行うときに依拠せざるを得ないある種の過去であり、また他者に対してはそのようなものとして現れる対他である。民族・階級・人種については、それは個人を促す共存のスタイル（本論文の用語に従えば共存のタイ

プ)と規定されており、普段は単に生きられるだけで認識されないものであるが、危機的状況や革命的状況においては主体が意識的になり何らかの態度を取るようにせざるを得ないものである。「役割」・類型の対他的性質は特に「戦争は起こった」で強調されており、それらは個人の行動において依拠される〈地〉であるが、他者にとっては〈図〉として現れるものであって、それゆえ他者からの迫害の原因になったり、逆に個人が他者を迫害する原因になったりするものである。

第二章では、類型の一つとしてコンプレックスを取り上げた。『行動の構造』では、一定の状況において患者に常同的な行動を取らせる病的なものとされ、『知覚の現象学』においても、コンプレックスは患者をある過去の状況に固定し、反復的な行動・態度を取らせることで新たな状況、現在と未来への開けを閉ざしてしまうものであると考えている。このようなコンプレックスの抑圧は、通常、人格的実存の周縁に存在する前人格的実存が、人格的実存に統合されず独立してしまっている事態として捉えられている。ソルボンヌ講義ではコンプレックスによって、病的なものに限らず、特定の状況に対する常同化した態度・行動のことが指されるようになる。ラカンの「家族コンプレックス」についてのメルロ=ポンティの考察から、家族構造と家族の構成員間の関わり方もまた類型の一つであることが明らかになった。メルロ=ポンティはエディプス・コンプレックスの普遍性をめぐる論争を参照した上で、集団や個人の行動を心理構造に還元する「心理学」と、同じものを社会構造に還元する「社会学」の立場をいずれも批判した上で、心理的要因と社会的要因の相互規定関係、「網目状の因果性」を考慮した学問を要請する。

第三章ではセクシュアリティを類型の議論として取り上げた。『知覚の現象学』によれば、セクシュアリティを通して他者は知覚される。メルロ=ポンティはソルボンヌ講義において、社会的・文化的布置を無視して女性の普遍的な〈本性〉というものを実体的に語ることに反対している。また女性の出産と子供の誕生の議論に際して、子供の誕生とは両親の二者関係へ子供が第三者として参入するという三者関係への力動的な移行であるという議論があり、親子関係には相互の同一化によって両価的な感情が伴うことが論じられていた。さらにメルロ=ポンティはM・ミードを参照しつつ文明に応じた男女関係の類型が存在すること、そしてその男女関係は養育という親子関係の類型と相関的であることを確認している。このように様々な類型が相関的であるのは、メルロ=ポンティにとってそれらの諸々の関わりが社会における全体的な一つの「実存の様式」の諸契機とみなされているためであろう。

第四章では、アメリカ人類学における「文化とパーソナリティ」研究についてのメルロ=ポンティの議論を確認した。「文化とパーソナリティ」研究こそ彼が「心理学」と「社会学」の対立の乗り越えを期待する第三の道である。彼はカーディナーの「基本的パーソナリティ」の概念を、ある集団の構成員に共通して見られ、世代間で伝承されていくパーソナリテ

ィの種類として取り上げている。この「基本的パーソナリティ」は親子関係の種類によって大きく規定されることになるが、同時にメルロ＝ポンティは親子関係の種類が子供の性格を最終的に決定する「原因」や「運命」ではないと述べている。また彼はレイトンとクラックホンによるナヴァホ研究を参照し、最初期の教育だけでなく、それ以降の時期も人格形成にとって重要であるということ、そしてパーソナリティが親子の関わり方にのみ起因するのではなく、生活様式、集団や個人の歴史、物理的環境などの「網目状の因果性」によって規定されるということも主張している。このような人類学の考察とは別個に、メルロ＝ポンティは、「心理的な硬さ」という種類の考察をする。この「心理的な硬さ」は世代間で伝承されるために、個々人の表面上の行動の違いにかかわらず権威主義から「心理的に硬い」タイプの自由主義を経て権威主義に戻るという伝統への回帰がしばしば生じる。このあたかも「運命」のような事態は、実際には「運命」ではない。論者はそれを示すためにも、ソルボンヌ講義における精神分析的性格学の議論を取り上げた。メルロ＝ポンティによれば、精神分析的性格学は、前性器期への固着を大人の行動・態度をあらかじめ決定する「原因」・「宿命」と見なすものではない。それらの過去は個人がいかにかそれに処するか（抑圧するか反動形成か昇華か）などが決定されていない類型であって、主体の自由は損なわれないのである。

第五章では『知覚の現象学』と「セザンヌの懐疑」における自由論を参照し、メルロ＝ポンティの自由概念が、「条件付けられた自由」であり、対他の自由を媒介にする対自の自由であることを明らかにした。他者知覚とは他者の〈類型からスタイルへ〉の自由の運動の知覚であり、この他者の自由とは主体による対他の自由の知覚を介した他者の対自の自由である。「セザンヌの懐疑」からは芸術家の自由の議論を考察したが、ソルボンヌ講義からはモレノのサイコドラマとソシオドラマについての議論を、芸術家ではない一般の人々の〈類型からスタイルへ〉の運動を描いた自由論として考察した。サイコドラマは、紋切り型の「役割」や類型を前意識的に生きていることで現実の状況に対応できなくなり葛藤している個人を、状況に対応した新たなスタイルを発明・獲得できるよう促すものである。ソシオドラマについては人種間の葛藤に関する実践が取り上げられており、そこでもやはり、偏見のような認識・態度・行動・対人関係の様式という類型が、意識化され具体的な状況に応じたスタイルへと変化を促されるという構図が見て取れる。

第三部では、「我々は他者とどのように交流しうるか」という問いを立て、主体と他者との交流の様態を問題にした。これが他者論として問題になるのは、他者の知覚が他者の表現の問題であるだけでなく、主体の側の、対人関係の問題（これは知覚と同様、広義の表現である）でもあるためである。

第一章では、メルロ＝ポンティにおける愛が、自己と他者の自由の相互侵食であること、

そして対他、諸性質、諸類型を通した人格への愛であることを確認した。またメルロ=ポンティの嫉妬の分析、そして嫉妬深い病的な愛の様相の議論を考察した。彼はその理論を病理の文脈から対人関係の文脈へと一般化した上で、幼児的な「独占的態度・独占的愛」と成人の「献身的態度・献身的愛」を区別している。メルロ=ポンティは前者から後者の態度への成熟を、自然に生じるような「状態」ではなく努力を要する「責務」と捉えている。さらにソルボンヌ講義では、子供の「独占的態度」における対人関係が、転嫁により互いが互いの自由を脅かし合う相剋の状態であり、大人の状態への移行でその脅威が止むという図式が見られた。このような〈子供の闘争から大人の平和へ〉という図式は、『知覚の現象学』における〈子供の平和から大人の闘争へ〉という図式と対照的である。

第二章では、メルロ=ポンティが、人間の科学における観察者と被観察者の同一化の現象を指摘し、また両者の不平等な関係から被観察者の〈本性〉なるものが作り上げられがちであると主張していることを確認した。このような不平等な関係は、大人と子供の関係において不可避的なものであり、さらに多くの他者経験における自己と他者の関係にも共通するものである。たいていの場合、他者とは、主体による過大評価（理想化）と過小評価（幻滅）を被る存在である。このような他者への両価的態度は、芸術から日常生活までの様々な場面で頻繁に生じているが、メルロ=ポンティはこのような対人関係を不当なものとも見なしている。彼の議論に則れば、主体は他者を自己の投影したイメージ（「役割」）に閉じ込めることを避けねばならず、自らの行動・態度の様式（類型）を捉え直し、具体的な他者と現実の状況に対応した新たなスタイルを獲得せねばならないのである。

## 成果のまとめ

本論文のソルボンヌ講義の体系的読解を通じて、従来のメルロ=ポンティ他者論の解釈、つまり原初的な自他の平和的共存による、平準化された人間同士の約束された共存の他者論に対して、メルロ=ポンティの中期他者論、つまり身体的・社会的・集団的・歴史的類型を通じて人間同士が出発地点において不平等でありながら、努力によって平等な共存を築かねばならないという他者論を提示できたと思われる。本論文で明らかにされたメルロ=ポンティ中期他者論には、人間が単に原初的交流を可能にする身体であるだけでなく、人種・民族・性などの類型を帯びた歴史的な身体であるという議論が存在しており、それらの類型を通じた他者経験という問題は、文化間・民族間・市民間の分断の進む今日においてこそ重要であろう。

## 主な参考文献

M. Merleau-Ponty, *Psychologie et pédagogie de l'enfant : Cours de Sorbonne 1949-1952*, Verdier,



- Lagrasse, 2001.
- M. Merleau-Ponty, « Les relations avec autrui chez l'enfant », *Parcours ;1935-1951*, Verdier, 1997, pp. 147-229.
- M. Merleau-Ponty, « Les sciences de l'homme et Phénoménologie », *Parcours deux : 1951-1961*, Verdier, 2000, pp. 49-128.
- M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, tel, Gallimard, 2011[1945]. 『知覚の現象学1』、竹内芳郎・小木貞孝訳、みすず書房、2006年[1967年]。『知覚の現象学2』、竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳、みすず書房、1979年 [1974年]。
- M. Merleau-Ponty, *Sens et non-sens*, nrf. édition Gallimard, 2013[1948]. 『意味と無意味』、滝浦静雄他訳、みすず書房、2005年。
- M. Merleau-Ponty, *La prose du monde*, tel, Gallimard, 2008 [1969]. 『世界の散文』 滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1979年。
- M. Merleau-Ponty, *Signes*, Gallimard Folio essais, 1960. 『シーニュ1』、竹内芳郎監訳、みすず書房、1969年。